

Title	Milton 一考察
Author(s)	小林, 恵子
Citation	Osaka Literary Review. 15 P.51-P.63
Issue Date	1976-12-25
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25666
DOI	10.18910/25666
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Milton 一 考 察

小 林 恵 子

序

Milton とは、言うまでもなく *Paradise Lost* (以下 *P. L.* と略す) の作者であり、かつ実際に政治活動にも携わった清教徒の思想家である。Blake は彼を心から尊敬していた。友へあてた手紙の中には、随所に彼の讚美が見られる。「Milton が、子供時代の私を可愛がってくれて、その顔を見せてくれました。」と書き、⁽¹⁾「私は Cowper 及び Milton のような人々に、如何なる帝王又は英雄よりも、ずっとはっきりと神々しい面差しを見る仕合わせを味っております。」⁽²⁾と述べてもいる。さらに、Milton の著作の挿画を数多く描いており、⁽³⁾それらは、Blake 独自の解釈を挿入しつつも、Milton に対する高遠な信頼と深い理解を示している。では、何故 *Milton* なのか？ Blake はその序詞の中で、りっぱな詩人故に許すことのできない欠点を1つ指摘する。

Shakespeare & Milton were both curb'd by the general malady & infection from the silly Greek & Latin slaves of the Sword.

(Pl. 1, Preface)

Roma に「武」でやっつけられた England は「文」でもその悪弊を受け、自国の靈的精神は根こそぎにされた。それ以後 England の文明は Greek, Latin artifice であり、その詩神は、the Daughters of Inspiration ではなく、the Daughters of Memory である、と Blake は嘆く。Milton は彼にとって、いわば the Daughters of Memory の犠牲者の代表である。その過失を正すために、Milton を再登場させ、*P. L.* の副題をそのまま借用して、“To Justify the Ways of God to Men.” の意図の下にこ

の叙事詩は始まる。この小論では、「Milton の過失」を問題提起にして、それでは「Blake のいう真理とは何か」を考察していきたい。

I

一般の信仰がそうである故に Milton も犯した過失の、その顕著なあらわれは *P. L.* における Milton の theory である。C. Raine は “*Milton is Blake's answer to Calvin or rather to Milton's Calvinism, which he saw as the satanic or natural morality. In this poem a new complication is added by the Calvinist terminology of the Elect, the Redeemed, and the Reprobate. Blake introduces these terms because Calvin's theology of predestination is that of Milton, at all events of those passages in P. L., Book III, that concern the redemption and the atonement.*”⁽⁴⁾ と述べ、この詩が Calvinism に対する 1 つの反駁であると指摘している。では Milton の Calvinism とは具体的に何であったか。我々は、Blake が Milton を批判した理由を、*Milton* にはるかに先だつ作品 *The Marriage of Heaven and Hell* の中に見出すことができる。そこでは Milton が the Governor, Reason を Messiah と呼んだ仔細が述べられている。そして *P. L.* の中では Energy の保持者が Satan と呼ばれ、その子等が「罪」と「死」と呼ばれている、という。「Milton は父を Destiny と見、息子を a Ratio of the five senses と見、聖霊を Vacuum とした。Milton が Angel や God を書いた時はかせにはめられて書き、一方 Devils や Hell を書いた時こそ自由に書いたのだ。」⁽⁵⁾ と言うのだ。とすれば、Milton の Bible 理解が、Blake にとって大きな問題となろう。*the Book of Job* では、Milton の Messiah は Satan と呼ばれていると Blake は考えるからである。Milton における「神に選ばれた者 Reason」の優越権、さらに 5 官に制限された道徳律の法典、それらに Blake はどうしても我慢できない。それこそ Greek や Latin 精神にしばられた Bible 理解だと彼は見るのである。*Milton* の中の次の詩句に

注意しよう。

Rahab Babylon appear'd
 Eastward upon the Paved work across Europe & Asia,
 Glorious as the midday Sun in Satan's bosom glowing,
 A Female hidden in a Male, Religion hidden in War,
 Nam' d Moral Virtue, cruel two-fold Monster shining bright,
 A Dragon red & hidden Harlot which John in Patmos saw.

(Pl. 40, ll. 17-22)

Roman Road を連想させる the Paved work の上を、ヨーロッパ、アジアへ、東方へと Moral Virtue をかきよきた宗教がひたしていく様子が生々と描かれている。それは *Revelation* における Harlot Babylon, Monster Dragon という終末的イメージと重なってひどく頹廢的に響く。Blake はこの宗教に犯された時空を 6000 年の Canaan の空間と呼ぶのである。そのうちでとりわけ Blake が鋒先をむけるのは、Milton の宗教を契機に新しく生まれ、holiness, self-righteousness を標榜してなお残酷をきわめている当時の思想及び思想家達である。

all the Daughters of Los prophetic wail; yet in deceit
 They weave a new Religion from new Jealousy of Theotormon.
 Milton's Religion is the cause; there is no end to destruction.
 Seeing the Churches at their Period in terror & despair,
 Rahab created Voltaire, Tirzah created Rousseau,
 Asserting the Self-righteousness against the Universal Saviour,
 Mocking the Confessors & Martyrs, claiming Self-righteousness,
 With cruel Virtue making War upon the Lamb's Redeemed
 To perpetuate War & Glory, to perpetuate the Laws of Sin.

(Pl. 22, ll. 37-45)

Canaan の宗教を基にするものは、どんなに新しいものであろうとも、宗教の名のもとに戦争をひきおこし、永遠に破滅への道を急ぐ以外の何物でもないのである。Blake にいわせれば、Adam, Seth, Enos からずっと続いて、Abraham, Moses, Solomon, Paul, Constantine, Charlemaine

から Luther へと連なる宗教闘争の中心人物も、Saturn, Jove, Rhea, Isis や Osiris などの異教の神々も同じことである。さらに上記引用文に述べられた Voltaire や Rousseau 以外にも Bacon, Locke, Hume, Gibbon, Bolinbroke にいたるまで批判の対象となり、‘Newton’s Pantcrator’ の汚名を着るのである。Shakespeare や Milton も例外ではない。彼らに付された形容詞は、常に natural であり思想は全て、Natural Religion, Natural Law, Natural Philosophy である。因みに Voltaire は、人間精神の歴史を暗黒の時代から啓蒙された思考への進歩として、つまり迷信としての宗教から科学への進歩として理解し、理性と科学の進歩こそ人類の道徳的社会的進歩に当然結びつくものであり、科学や技術の発達こそ社会の偏見をなくし必ずや人類を幸福へ導いてくれるに違いないと考えていた人である。このような進歩の観念も Blake が根本的に排斥したものであることは大いにうなずけよう。

以上のことから Milton を書く動機が 1 人 Milton だけの過失からだとするのは大いに間違っている。Roma 宗教が入ってきて以来、いや宗教というものが明文化して以来の巨大な誤ちの是正が目的なのである。Milton が犠牲者だと言ったのはこのためである。我々はよく Milton の過失を、Blake が Crabb Robinson に語ったという次の言葉にみようとする。

“I saw Milton in imagination, and he told me to beware of being misled by his *Paradise Lost*. In particular he wished me to show the falsehood of his doctrine that the pleasures of sex arose from the fall. The fall could not produce any pleasure.” (7)

だが、F. Damon は、Blake が Milton の the idea of sex よりもむしろ、P. L. の中で Milton が Reason に Love の席を譲ったこと、Fansie を 2 次的なものにしたことに対して同意できなかったからだと述べている。(8) Blake の思想的発展から見れば、以前の Energy に対する情熱がひいていき、新しい詩人の使命として Imagination に活路を見入出している矢先でもあり、(9) いままで見てきたように Blake の対象が Milton のみでなく過去に根深く巣くった Reason を基にする宗教であって見れば Damon

の見解は妥当であるように思える。ただ Blake にとつて Moral Virtue の1つの柱「禁欲」はあくまで Reason と緊密に結びついていることは指摘しておかなければならない。それらの事情は、Milton 作製時のことを吐露した次の詩句からも容易に窺うことができる。

when Los join'd with me he took me in his fi'ry whirlwind:
 My Vegetated portion was hurried from Lambeth's shades,
 He set me down in Felpham's Vale & prepar'd a beautiful
 Cottage for me, that in three years I might write all these Visions
 To display Nature's cruel holiness, the deceits of Natural Religion.

(Pl. 36, 11, 22-25)

II

叙情詩は、Milton が100年間 Eternity を巡り、摂理の迷路を沈思しているのに幸福ではないということから始まる。それは彼が己れの sixfold Emanation と分離しているからだと説明される。Emanation とは Milton をとりまいていた3人の妻と3人の娘の女性的象徴として sixfold と形容されるが、Blake においては、清教時代において Milton が欠いていた Inspiration の象徴であり、一方 Milton 自身は男性的象徴として Spectre と呼ばれ、それは Reason を象徴する。この分離の状態故に、Milton はこの世1回限りの Generation しか知らず、Regeneration を経ることがなく、Eternal Death に導かれている。つまり Milton の Eternity は地獄なのである。それが彼を the Deep に降りていかせる原因となる。勿論 Emanation をとりもどすために…… それらは全て1人の Bard によって語られ、彼は次の様に前置きして真理を語る。それこそ Blake が見た第1のそして最大の Vision である。

"I am Inspired! I know it is Truth! for I Sing
 "According to the inspiration of the Poetic Genius
 "Who is the eternal all-protecting Divine Humanity,

“To whom be Glory & Power & Dominion Evermore. Amen.”

(Pl. 13, 1. 51—Pl. 14, 11. 1-3)

Inspiration によるものこそ「真理」である。その Bard (Blake に他ならない) は Calvin を相手どり、the Elect, the Redeemed, the Reprobate は実際は何であるのかを披瀝する。Time — Space において 3 階級の者がつくられる。それらは、the Elect (世界建設前からの選民)、the Redeemed (罪の除去が約束されたもの)、the Reprobate (母の胎内から破滅するように形造られたもの) であるが、それぞれの固定された役割は、大収穫に Eternity の Mill を動かすこと、Harrow をとること、Plow をとることである。その名は Satan, Palamabron, Rintrah である。つまり the Elect は Satan である。本来耕作に寄与しないものである。Mill とは、つくられたものをくたく役割を担う場所である。この the Elect は根本的に the Redeemed と the Reprobate とは異なる。次の 2 つの詩句にその根拠を見入出すことができる。

the Elect cannot be Redeem'd, but Created continually
By Offering & Atonement in the cruelties of Moral Law.
Hence the three Classes of Men take their fix'd destinations.
They are the Two Contraries & the Reasoning Negative.

(Pl. 5, 11. 11-14)

There is a Nagation, & there is a Contrary:
The Negation must be destroy'd to redeem the Contraries.
The Nagation is the Spectre, the Reasoning Power in Man:
This is a false Body, an Incrustation over my Immortal
Spirit, a Selfhood which must be put off & annihilated away.

(Pl. 40, 11. 32-36)

Negation と two Contraries の違いがはっきりとわかる。この 3 階級の構造について、N. Frye は我々に Druidism の 3 巨石を想起するように言う。⁽¹⁰⁾ the Redeemed と the Reprobate は上に向かって伸びる縦石、1 つは男性的 strength, 他は女性的 beauty, 共に拮抗しあって life を高めていくもので Human Existence と呼ばれる。the Elect は伸びる 2 つ

の石を抑える横石、Death を導き、State と呼ばれる。ここで Moral Law, Reasoning Negative, Negation, Spectre, Selfhood と呼ばれているのは全て State (本質的存在でなく状態) である。それは客観的世界を人間から独立しているものと仮定し、その中に神を創造し、存在する悪や不正を法の下に理論化する Deism の原理である。Blake はこの Deism の Natural Visionこそ Satan だというのである。これに従えば、18世紀いわゆる Classicism を支配した Deism ばかりでなく、それ以前の Puritanism, Renaissance いや中世までも Deism の範疇に入ることになる。一方、先に見たように、Contraries のみが生の領域だということである。それは何か? *The Marriage of Heaven and Hell* の中には次の様な詩句が見られる。

From these contraries spring what the religious call Good & Evil.

Good is the passive that obeys Reason. Evil is the active springing from Energy.

Good is Heaven. Evil is Hell. (1)

さらに、*Milton* と同時に書き始められた *Jerusalem* の中にも次の様な詩句を見入出すことができる。

They (the Sons of Albion) take the Two Contraries which are call'd Qualities, with which

Every Substance is clothed: they name them Good & Evil;

From them they make an Abstract, which is a Negation

Not only of the Substance from which it is derived,

A murderer of its own Bobby, but also a murderer

Of every Divine Member: it is the Reasoning Power,

An Abstract objecting power that Negatives every thing. (2)

Milton の中には Good, Evil の言及はないが、この Contraries がそれを指すことに間違いはなからう。法の束縛する善悪の知識の下で活動するのが the Redeemed (Good) であり、実存的自由圏の中で活動するのが the Reprobate (Evil) であり、それらが弁証法的に純粋な創造をつくり

出し、真の Eternity に到達するのである。それを Blake は Human Vision というのだ。Negation と Contraries は、Blake の「生と死の観念」をはっきり区別するものとして重要である。考えて見れば、Milton は P. L. において Good を God とし、Evil を Satan とし、Death を Satan の子としているのだ。だから Milton の中で、彼自身が Good を残している Spectre の形をとり、Evil としての Inspiration を欠くことになるのだ。そしてついに、この間違いに気づき、“I have turned my back upon these Heavens builded on cruelty. (pl. 32, l. 3)” と叫ぶことになる。この天国は、生の領域に関係ない、絶対的悪 Satan の支配する客観的世界である。それは見せかけの自然にすぎない。

every Natural Effect has a Spiritual Cause, and Not
A Natural; for a Natural Cause only seems: it is a Delusion
of Uro & a ratio of the perishing Vegetable Memory.

(Pl. 26, 11. 44-46)

Natural に対して Spiritual という形容詞が使われている。Natural Religion に対して、Blake が尊重するのは Spiritual Religion (= Revealed Religion) である。それが彼の Bible 理解を支えている。Bible を、実存的な自由、Inspiration の特許状だと読むのである。人間は spiritually には眠っていて、自分の内部の Eternity に気づかずにいるが、実は個々人の内部にこそ Infinity of Power があるのだと……この読みは、Bible を psychological allegory に読もうとする William Law の系譜からきていると John Beer は指摘している⁽¹³⁾。外部に見るものには、限られて見える空間も、内部に見るものには無限なのである。外部に見るものとは五官の幻覚にまどわされて、そこに見える Nature にならうことだけに専心し、人間を法則化されたパターンにくみこもうとする人のことである。それが Good であることは既に述べた。Blake にいわせれば Milton (Good) は Satan (Nature) にまどわされて、Emanation (Evil) を捨て去ったということになる。Emanation とは当然、内部に眠る Inspiration である。

III

Blake の「真理」が確立すれば、彼の使命は己ずと理解される。Satan と呼ばれるこれら一連の Natural Vision を拒むことである。個々人の内部を見ることによって、Good と Evil を結合させることである。Blake にとって、Nature は sub-human であり、それ故に行なわなければならないのは、この Nature を純粹に human なもの、より神聖な形態にすることである。Frye は「Blake の詩人としての独自性は、彼自身の時代の歴史的意義をさとの能力であり、彼は詩人の創造的想像力を神の想像力と同一視したロマン主義者の始めての、又きわめてラディカルな詩人であった。」と述べている。⁽¹⁴⁾ 確かに彼が Prophet としてまず主張するのは、Reason の墮落をこうむらない墮落以前の創造的想像力 Imagination である。Milton の過程の中で、Imaginative Power を象徴する Los と、誤ちを悟った Milton と、これから使命を伝授していかなければならない Blake が三位一体の形をとるのはそのためである。肉体を持った時空の中で、蒙昧の Memory をとり去ろうとする Blake のいきごみが見られるのは、この合体の形をとってからである。Time を担った Los は次の様に表現されている。

He is the Spirit of Prophecy, the ever apparent Elias,
 Time is the mercy of Eternity; without Time's swiftness,
 Which is the swiftest of all things, all were eternal torments.
 All the Gods of the Kingdoms of Earth labour in Los's Halls:
 Every one is a fallen Son of the Spirit of Prophecy.
 He is the Fourth Zoa that stood around the Throne Divine.

(Pl. 24, 11. 71-76)

苦しみをまとった全ての肉体は、その内部においては、Los によって建てられた壮大な建物を持っている。それは Satan の玉座の4つの柱 (Temperance, Prudence, Justice, Fortitude) から全く自由なものである。というのは、その内部は、Art と呼ばれる何物にも犯されない Human Vision

の世界だからである。夜の星座、夏に飛ぶはえ、山々の木、春の歌をうたうひばり、それらはみんな Los の息子達であり芸術の収穫なのである。花々を見たまえ、一体どうしてそんな小さな中心からあんなすばらしい香りを放つのか。なぜならその内部に Eternity が拡がっているからだ。ただ我々は5官の視覚でこれらのすばらしい Vision を見るために、いわば着物のへりを見ているにすぎないのだ。だがどうしたら visionary eye を持つことができるのか。それを解いてくれるのが Milton である。我々の目をおおっている Satan に対して Milton は次の様に言う。

“Satan my Spectre! I know my power thee to annihilate
“And be a greater in thy place & be thy Tabernacle,
“A covering for thee to do thy will, till one greater comes
“And smites me as I smote thee & becomes my covering.
“Such are the Laws of thy false Heav’ns; but Laws of Eternity
“Are not such; know thou, I come to Self Annihilation.
“Annihilate himself for others’ good, as I for thee.”

(Pl. 38, 11. 29-36)

他のために自己を捨てること、もっと正確に言えば、自分の Reasoning Spectre を Divine Vision に従わせること、それが Eternity の法であると言う。ここで Druidism の3巨石を思い出せば Self Annihilation とは、横石を捨てなければ Human Vision を見ることができないと悟った Milton (Good) と Satan の Self-examination, 内部葛藤である。この石を捨てなければ自分のもう1つの Contrary (Inspiration) をとりもどせないまま、永久に Canaan の空間の堂々巡りである。Milton の力強い言葉を聞こう。

“To cleanse the Face of my Spirit by Self-examination,
“To bathe in the Waters of Life, to wash off the Not Human,
“I come in Self-annihilation & the grandeur of Inspiration,
“To cast off Rational Demonstration by Faith in the Saviour,
“To cast off the rotten rags of Memory by Inspiration,
“To cast off Bacon, Locke & Newton from Albion’s covering,
“To take off his filthy garments & clothe him with Imagination,

“To cast aside from Poetry all that is not Inspiration”

(Pl. 40, l. 37— Pl. 41, ll. 1-7)

熱狂的に語るその口調は、Milton のそれから次第に当時の追従的芸術に憤る Blake の憤怒の声に移向する。彼はこの叙事詩を immediate Dictation から書いたのであり、Premeditation なしに一気に12行、時には20行、30行と書いたと語っているが、このあたりは Blake のもっとも高揚した瞬間の詩句であろう。この「To……」を含む Milton の言葉は文字通り37行も続く。だが恐らく Satan を捨てるとは、そんなにたやすいことではないのだ。いままでに蓄積した垢はもう堅くかたまっているからだ。そこに Blake のもう一つの思惟「Time のもつ mercy」の重要性が浮かび上がってくる。それは努力するものに与えられるすばらしい恩寵なのだ。

There is a Moment in each Day that Satan cannot find,
Nor can his Watch Fiends find it; but the Industrious find
This Moment & it multiply, & when it once is found
It renovates every Moment of the Day if rightly placed.
In this Moment Ololon descended to Los & Enitharmon
Unseen beyond the Mundane Shell, Southward in Milton's track.

(Pl. 35, ll. 42-47)

Milton が Spectre を捨てる努力をしている時、ある瞬間に自分の Emanation をとりもどすのだ。Ololon とは、実は sixfold Emanation の別名である。その時始めて Milton は自分に欠けていた Contrary を見出し至上の境地 Human Imagination に達するのだ。象徴的に言えば、男の strength と女の beauty が合体し、天を貫き永遠の Vision を見るのだ。「瞬間」それは5官の中にあるものが、内部を開く鍵であり、限られたものが、限界を越えて、Eternityに到達する鍵である。Milton (=Blake) は、この英知の鍵を手にした、瞬間、稲妻にうたれて倒れる。それが肉体をもったままの Blake 自身の Regeneration である。彼は最後の Plate の後ろに、次の様な意味深長な言葉を記している。“Father & Mother. I return from flames of fire tried & pure & white.”⁽¹⁶⁾ この様な肉体を

もったままの Regeneration という象徴は、いままでの Blake の予言書の中には見あたらない。John Beer は、「これは人間はいつも肉体のまま、Judgment のもとにいる。つまり人間の行為の結果はいつも収穫されるのだという思想である。」⁽¹⁷⁾と述べている。Blake はいまだ目を閉ざし、内部を閉ざした人間のために、執拗に Memory から Inspiration への交替の瞬間を提示する。この日常生活も visionary eye を開くことができれば、すばらしい Human Imagination の世界なのである。それが Blake のいう Regeneration, 新しく生まれることである。

結

Blake は Milton を借りて、或いは Milton の誤りを借りて、自らの真理を展開した。Self Annihilation と a Moment of Inspiration は、Eternity の世界を開く2つの要石である。

Milton における Satan を、Damon は個人的に Blake の patron であった Hayley だとし、⁽¹⁸⁾D. Erdman は、社会的なとらえ方で、Cromwell や Napoleon だといふ。⁽¹⁹⁾又 Raine 女史は、Calvin 或いは Milton の Calvinism だと指摘する。しかし、Blake はいままで見てきたように、もっと universal point of view から物を見る人間であり、Satan の根は実はもっと根深いのである。そして Blake が予言者として語る以上、彼の本意は、過去の批判を軸にしているとはいえ、未来の読者に向けられているといえるであろう。この現在になすべき正しい事は何かを認識し、過失に対しては真理のあくなき苦闘を戦えと読者はせまられないであろうか。作品の中で何度もくりかえされる “Mark well my words! they are of your eternal salvation.” という言葉は、詩人が読者に呼びかける肉声であろう。彼の context の中で、我々も又 Natural Vision に犯され、Memory に頼っているが、実は個々の瞬間に Human Vision の交替があること、内部を解放する努力によって Blake が意味するものの中に参入できること、を本当に理解するなら、彼の目的は達成されたと言えるのだ。実は Blake は自分の中に開花したこの英知に対して大きな影響を期

待していた。それは *Milton* 作製の翌年、1809年に彼の絵画を公にするため、展覧会を開いたことからもうかがわれる。しかし、Romantic movement の黎明期、人々はまだ眠っていた。この展覧会は大失敗に終る。「群衆喜んで彼に聞いた。(Mark, 12:37)」になるには、あまりに esoteric であつたせいであろうか。だが、後の人々はやがて、この prophet の言葉に、絵画に震撼するようになるのである。

注

原詩の引用はすべて、*The Complete Writings of William Blake*, ed. Geoffrey Keynes, Oxford U. P., 1969 の *Milton, a poem in 2 Books* (pp. 480-535) により、それぞれ Plate 番号 (Pl. と略す) で示してある。

- (1) A Letter to John Flaxman, 12 September 1800.
- (2) A Letter to William Hayley, 28 May 1804.
- (3) *Milton* 作製時 (1804-1808) までに、*Comus* 8枚、*Paradise Lost* 21枚を描き、その後 *On the Morning of Christs Nativity* 6枚づつ2組、*Il Penseroso* 6枚、*L' Allegro* 6枚、*Paradise Regained* 12枚を描いている。
- (4) C. Raine, *Blake and Tradition*, Vol. I, p. 219.
- (5) Cf. *The Marriage of Heaven and Hell*, Pl. 4, 'the voice of the Devil.'
- (6) Cf. 伊藤勝彦編、『知性の歴史』pp. 146-147. 新曜社。
- (7) Cf. S. Foster Damon, *A Blake Dictionary*, 'Milton' p. 276.
- (8) *Ibid.*
- (9) Cf. *OLR*, No. xlv, 拙稿、'Vala or the Four Zoas, Blake における思想的変遷。'
- (10) Cf. N. Frye, *The Stubborn Structure*, 'The Keys to the Gates' pp. 183-190.
- (11) *Op. cit.*, Pl. 3.
- (12) *Jarusalem*, Pl. 10, ll. 8-14.
- (13) J. Beer, *Blake's Humanism*, pp. 208-209.
- (14) *Op. cit.*, 'The Road of Excess' pp. 171-172.
- (15) A Letter to Thomas Butts, 25 April 1803.
- (16) この言葉は、Pl. 43 の絵画スケッチの裏に記されていて、Keynes 編集 *Milton* 以外の text の中にはとり入れられていない。
- (17) *Op. cit.*, p. 184.
- (18) *Op. cit.*, p. 277.
- (19) D. V. Erdman, *Blake: Prophet Against Empire*, pp. 424-426.